男子第6回・女子第3回アジア選手権大会を終わって

多くの方々の協力と熱意に感謝

～残念ながらオリンピック出場は成らず～

(財)日本ハンドボール協会
専務理事　　　安藤純光

男子第6回・女子第3回アジア選手権大会は、さる8月22日から9月1日まで11日間にわたって広島市において開催された。

この大会は1992年に開催されるバルセロナ・オリンピックのアジア予選および世界選手権アジア予選をも兼ね、三つの大きなタイトルのかかった大会であった。全国のハンドボール関係者のみならずファンの大きな関心を集め、男子ナショナルチームの6連続オリンピック出場の期待をかけた大会であった。しかし、残念ながら期待に沿う結果をみることはできなかった。

この大会はソウル・北京とアジア大会のいわばリハーサル大会として開催されるようになってきた。これにならって、1994年アジア大会の開催が決定している日本・広島の開催は、1989年北京において開催された、男子第5回・女子第2回アジア選手権大会の開幕に先立って、開催されたアジア連盟理事会において、次回大会を日本・広島で開催することが決定された。日本での開催は、6回を数える大会であれば当然の決定ではあったが、日本ハンドボール協会として大会開催のための準備、とくに資金的な準備が整っていたわけではなかった。概算2億円に達する開催資金を、いかにして確保するかは最大の課題であった。また、大会の規模からいっても、50余年の協会史上初の大イベントをいかに運営するかについても大きな課題であった。

6月8日、東京ワシントンホテルにおいて選手権大会の抽選会が開催され、アジア連盟（AHF）1st Vice President Mohammed Ali ABUL氏によって男子12チームをA、B、C、Dの4グループに分ける抽選が行われた。その結果、Aグループ：中華人民共和国〔CHN〕、カタール国〔QAT〕、朝鮮民主主義人民共和国〔PRK〕、Bグループ：クウェート〔KUW〕、シリア・アラブ共和国〔SYR〕、アラブ首長国連邦〔UAE〕、Cグループ：大韓民国〔KOR〕、バーレン国〔BRN〕、イラン回教共和国〔IRN〕、Dグループ：チャイニーズタイペイ〔TPE〕、日本国〔JPN〕、サウジアラビア王国〔SAU〕、そして参加について種々の問題のあったオセアニアからのオーストラリアとなった。オーストラリアは、第1次予選リーグのみの参加となり、しかも対戦チームの成績には関係しない参加となった。女子は、大韓民国〔KOR〕、日本国〔JPN〕、中華人民共和国〔CHN〕、朝鮮民主主義人民共和国〔PRK〕、チャイニーズタイペイ〔TPE〕の5チームの参加であり、1グループ総当たりリーグとなった。

抽選会を終わり予定通りであれば過去の大会にない、AHF男子グループA、すべてのチームの参加となるが、チームが到着するまで不確定であり気を揉むことになった。アラビアの各国との連絡は非常に困難であり、とくに入国査証の問題はチームが広島へ到着するまでさまざまな問題があった。94年のアジア大会時には広島空港が国際空港になるが、広島空港が国際空港でなかったことも複雑さに輪をかけた。とにかくいろいろな問題はあったにせよ予定された男子12チーム、プラス、オーストラリアの計13チーム、女子5チームが広島に集い、8月21日、代表者会議が開催された。会議は若干の競技日程の変更などの他は問題もなく終了し、明日の開会式を待つばかりになった。

8月22日、広島サンプラザにおいて11時30分より開会式が行われ、13時よりのオープニングゲームで、選手権大会の競技が開始された。個々の競技の技術的な問題は他に譲ることにするが、日本男女ナショナルは大きな期待を背にして見事な試合ぶりで、それぞれ開幕戦を飾った。女子はTPEとの対戦であったが、よく走り着々と得点を重ね36－18のダブルスコアーで破り、快調なスタートであった。SAUと対戦した男子もまた相手の得点を8点に抑え、28得点を挙げて快勝した。両チームの第一戦の戦いぶりは、この大会の行方に十分な期待を抱かせる素晴らしいものであった。

女子は28日に本大会最大の山、KORとの対戦を迎えた。ソウル・オリンピック金メダルの韓国は、当時からみると力は落ちているとはいえ、どのゲームも余裕のある戦いぶりであった。日本女子は緊張のあまりかミスも出て墓穴を掘るような場面もあり、夢をくじかれた。31日女子最終戦に2位をかけてCHNと対戦、僅少差ではあるが勝って一歩前進の2位を確保した。

男子は第一戦の快勝のあと、もう一つ波に乗れないゲームが続いたが勝ち進み、準決勝戦でCHNとの対戦を迎えたが26—18と圧勝しKORとの決勝戦に駒を進めた。

9月1日この大会の最終日、期待の男子の決勝戦が14時5分より行われた。残されたバルセロナへの道は唯一ここしかなくなっている。おそらく日本のハンドボールにかかわりを持つ人たちすべての注目を集めて行われた。ゲームはスタート直後、日本のシュートがゴールをはずれ得点できないでいるうちに韓国は着々と得点を重ね、日本は終始追う立場に立たされることになった。結局スタートでの差が最後までたたり逆転することができず23—27で敗れた。韓国は日本の追い上げに対して、ここぞというときに確実に得点できる力をもちソウル・オリンピック銀メダルの面目を保った。かくして男女とも韓国が王座に着くことになった。日本の関係者からいえば残念なことではあるが、韓国男女チームがアジアの代表としてバルセロナ・オリンピックでの十分な活躍を期待し、心から敬意を表し『おめでとう』を申し上げる。

大会は、決勝戦のあと閉会式が行われ、18時より会場をANAホテルに移して、参加者全員が出席して、盛大に『SAYONARA　PARTY』が行われ、すべての日程を終了した。

先にも述べたように、協会の歴史上初めて迎える大イベントを、いかに開催するかは大きな問題であった。開催決定の後、早速開催地となる広島県協会と協議し、準備委員会を設けて作業を進めることとした。さまざまな問題がある中で、概算2億円におよぶ運営資金をどのようにして調達するかが最大の課題であった。種々検討の結果、広告ボードおよびプログラム広告による収入と全国のハンドボール関係者に2年間にわたって協力金の拠出をお願いした。広告については、毎度のことではあるが加盟の実業団チーム所属企業にお願いし協力をいただき、また新日鉄・伊藤忠商事・アシックス・モルテン・マツダ・キリンそして長年にわたってご支援いただいている東洋証券など多くの企業の協力を得て、目標額をほぼクリアーすることができた。

また、協力金については、一部には批判の声もあったが高校生プレイヤーをはじめすべてのハンドボールプレイヤーから、さらに理事・評議員・地方協会役員・審判員の諸兄に2年間にわたって協力金の拠出をお願いし、これもまたほぼ目標額の協力がえられた。広告協賛について、実業団連盟会長渡辺佳英氏・副会長湧永儀助氏には、協力依頼にでむいていただくなどこの面でも大変なご協力をいただいた。さらに広島県および広島市からも大きな援助いただいている。大会の経理については目下清算中であり、近々詳細を報告する。

大会の運営にあたっては開催地広島県協会・広島市協会の諸氏の献身的な協力があった。日本協会と広島実行委員会との合同会議を前後3回にわたって開催し、円滑な運営を図った。とくに広島実行委員会の諸氏は開催が決定してからの2年間もなることながら開催期間中は夜を徹しての作業など大変な尽力であった。こと終わって若干の問題点は残ったにせよ、大会は大きな成果を挙げて終了することができたといえるであろう。『皆さん大変ご苦労さまでした！』

今後の問題として、『いかにしてアジアのキング・クイーンの座を取り戻すか』の課題が残された。今回連続出場を断たれたが、再度挑戦しなければならない課題である。

このためには長期的な、計画的な強化策を検討し、捲土重来を期さなければならない。

今回わが両ナショナルチームは、よく戦ったしともに韓国に敗れたとはいえ、その距離は接近している。さらに一歩一歩着実な強化が望まれる。

後になったが、この大会のために各方面から寄せられた協力と熱意に対して、唯ただ感謝と敬意を表し、誌上をかりてではあるが厚くお礼を申し上げ、今後も変わらぬご支援をいただくようお願いしてこの拙文を閉じることとする。

再建に向けて関係者の一層の努力を

谷戸忠司（読売新聞運動部）

アジア選手権を終盤の3日間、取材した。来年のバルセロナ五輪予選を兼ねた大会。球技の五輪切符第1号は男子バレーボールにさらわれたが、ハンドボールは男子がこれまで5回連続代表権を獲得しているし、今回も、特に男子が有望とあって、期待を持って広島入りした。男女とも残念な結果になったが、日本では久し振りにタイトルのかかった国際大会。会場に足を運んだファンは、ハンドボールの面白さを

改めて感じたろうし、私自身も試合を堪能させてもらった。

3日間の6試合の中では、まず最終日の男子決勝、日本―韓国戦に触れなくてはなるまい。過去の戦績、大会に入ってからの調子などを見て、実力は六分四分で韓国有利、地元の利を加味して五分五分というのが私の戦前の予想だった。

「勝てば五輪切符」ということで、当日はファンの出足も上々。記者室の電話に「当日売り（の切符）はあるのか」との問い合わせも少なくなかった。決勝開始直前の発表では観衆4千人。かなりの立ち見客もいて、超満員の盛況だった。

ただ皮肉なことに、これが日本チームにはかえってプレッシャーになってしまったようだ。選手は大きな応援に「何としても勝たなくては」の気持ちになり、硬くなった。シュートがゴール枠から大きく外れ、パスミスを繰り返す。日本の初得点は開始約7分後。それまでに韓国は3点を入れていた。

韓国の1―2―3ディフェンスも誤算だった。これまでの試合から、日本は一線防御でくると読んでいたようだ。韓国の左右45度が思い切って前に詰めるため玉村、中山が思うようにシュートを打てない。これも日本のリズムを乱す要因になった。韓国の李撥政監督は「それまでは選手の自由にさせていたが、日本戦だけはこっちで（守備陣型を）指示した」と、作戦が的中して胸を張った。

そして、韓国はエース姜在源の存在が大きかった。素晴らしいフットワークで、ロング、カットイン、サイドとどこからでも打てる。アシストも絶妙で、アジアナンバーワンの名に恥じないプレーを見せてくれた。

常に4～5点を追う展開。後半、2点差まで詰めたときもあったが、韓国を慌てさせるまでにはいかなかった。かねてから、日本選手は精神面に課題があるとされ、パラシュート降下訓練までやって精神力を鍛えてきたが、やはり大事な一戦で出てしまった。津川監督もさぞ無念だったと思う。

女子は、優勝した韓国との試合は見られず、中国戦だけ見た。結果は中国に9年ぶりで勝ち2位。お互いにミスが多く、技術的には不満も残ったが、1点を争う展開は見ていて楽しかった。韓国戦も、最大の敗因はミスによる自滅で、決して勝てない試合ではなかったようだが、戦前の日本女子は「3位が順当」と見られていた。中国を破った選手の頑張りを素直に評価したい。

さて、男女とも韓国の壁を破れなかった日本。5年後のアトランタ五輪目指して再スタートを切るわけだが、展望はあるだろうか。

はっきりいって今回以上に厳しくなるだろう。男子の場合、現在の全日本メンバーはベテラン中心で、決勝の韓国戦ベンチ入り選手の平均年齢は26・75歳。これに対し韓国は23歳と若い。25歳未満は日本が中山ひとりなのに、何と8人もいた。しかも、現日本のジュニア強化体制を見れば、この先、韓国を上回る若手が伸びて来るとも思えない。

厳しさからいえば、女子は男子以上だろう。韓国のスピードやパスワークフェイント力に対抗できるチームは、2年や3年ではとてもできまい。でも、だからといって強化を諦めてしまっては困る。女子の場合、148日の合宿が2位という成果になったのだから。

ハンドボールに限らず、日本スポーツのジュニア強化は、学校という厚い壁のため、思うに任せないのが現状だしかし、打倒韓国を果たすためには、それこそ画期的なジュニア強化策をやらないことには、半永久的に不可能な気がする。

日本協会をはじめ、関係者の一層の努力に期待したい。

男子

第6回アジア選手権大会成績

◆**1次予選リーグ**

▼Aグループ

中　国 23（11－7, 12－8）15 カタール

中　国 27（13－7, 14－11）18 北朝鮮

カタール 25（11－9, 14－6）15 北朝鮮

〔順位〕①中国②カタール③朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）

▼Bグループ

クウェート 29（14－6, 15－13）19 シリア

クウェート 24（13－9, 11－9）18 アラブ首長国

アラブ首長国 31（15－9, 16－16）25 シリア

〔順位〕①クウェート②アラブ首長国連邦③シリア

▼Cグループ

韓　国 34（17－8, 17－10）18 バーレーン

韓　国 43（19－13, 24－9）22 イラン

バーレーン 31（14－16, 17－15）31 イラン

〔順位〕①韓国②バーレーン③イラン

▼Dグループ

日　本 28（12－4, 16－4）8 サウジアラビア

ヨーロッパ遠征やアメリカズガップなどで充分に実力をつけた全日本男子が、ひと回り大きくなって雄姿を見せた。

スタート早々、全日本はスピードのあるパスワークで得点を重ね、25分経過したところで10－2と大きくリード、玉村、酒巻らのコンビで攻撃は冴え、サウジアラビアを完全に突き放し、大きなリードで前半を終了、トレーニングの成果を発揮した。

後半に入っても日本の速攻は続き、よく走るサイドプレーヤーの堀田につないで得点を連取した。ベテラン高村、荷川取を中心とする堅い守備は後半も乱れず、サウジアラビアにつけ入るすきを与えず、完璧なゲーム展開でまず緒戦をものにした。

タイペイ 21（12－11, 9－10）21 サウジアラビア

日　本 29（15－9, 14－7）16 タイペイ

予選リーグ第1戦を軽く乗り越えた全日本は、スタートからとび出し、まずポストの荷川取につないでPT、それを堀田が決め、続いて酒巻のミドルで連取、幸先の良いスタートを切る。しかし、タイペイも左サイド、続いて右サイドからループで決め同点。

その後、全日本はペースを取り戻そうとフォーメーションから河原、玉村と連打するが、GKの好守に阻まれる。いつもより苦しい試合展開となった。しかし、さすがは全日本。中盤を迎えて調子を戻し、タイペイのシュートミスをすかさず速攻に結びつけ、流れるようなパスワークから堀田が大きく跳び、2段モーションからのジャンプシュートで鮮やかに決め、このあたりからようやくエンジンがかかる。

タイペイも早い動きで何んとか突破口をつかもうとして攻撃するが、全日本の堅いディフェンスは乱れを知らない。さらに全日本は、荷川取のポスト、河原のサイド、首藤のロング、高村のインターセプトからの速攻などで大きくリードして前半で勝負を決めた。

後半に入っても全日本の快調は続き、斉藤、中山らがシュート・モーションで充分に守備を引き寄せてはエース玉村にパス、玉村は独得のモーションで簡単にロングを決め、19点目、まさに練習場の雰囲気となる。多くの経験で身につけた自由自在の動きを展開した。韓国戦へ明るい材料を残して2次予選リーグへと進む。

〔順位〕①日本②チャイニーズタイペイ（タイペイ）③サウジアラビア

◆**2次予選リーグ**

▼I組

カタール 21（10－5, 11－8）13 クウェート

日　本 25（13－9, 12－12）21 バーレーン

開始早々、日本は右サイドを巧みに攻める巧者・堀田にボールを回し、簡単に先取点を取る。その後は凡ミスが続き、5分まではバーレーンのポスト、PTなどで1－2とリードされる。

その直後、斉藤、中山から右サイドに位置した玉村に早いパスが回って、玉村の大きなジャンプシュートで得点。これで調子に乗せたかに見えたが、チャンスをつかみながらわずかにシュートにずれがあり、得点につなぐことが出来ず、13分まで4－3とシュートを多投するが得点にならず苦戦が続く。逆にシュートミスから速攻を許し、再びリードを許す。

日本は、堀田のミドルや首藤のロングでようやく引き離しにかかるが、いつもの調子が出てこない。こんなはずはないとチーム内にややあせりが見える。

大きな長丁場の試合では、ひとつぐらいは調子の悪い試合もあるものだが、それにしてもこの試合、ここまでは最悪の状態である。

後半に入り、バーレーンのミドルシュートが入り、一気にたたみかけようとする日本の出鼻をくじく。前半に引き続きバーレーンの善戦は続く。その後も一進一退は15分過ぎまで続いたが、日本は速

攻やポストでじわじわと引き離しにかかるが、密集地帯でのパスミスが続き、27分過ぎ、また3点差まで詰め寄られる。やや消極的になる日本だが、このピンチで若きエース中山が復帰してとどめの強打を放ち勝利をものにした。

バーレーン21（11－8、10－12）20クウェート

日本24（11－6、13－4）10カタール

クウェートを破り調子に乗るカタールを迎え撃つ日本は、一昨日バーレーン戦で思わぬ苦戦、やや曇りがちであったが、この試合で何んとか調子に乗せたいところである。

玉村のロングで1点を先取するが、ポストプレーで返され1－1。玉村から横パスが流れ、それを首藤がジャンプシュートで決めて2－2。8分過ぎ、相手のミスを巧く速攻につないで得点、ようやく主導権を握る。カタールは、速い動きで攻めようとするが、パスミスが目立つ。日本は、バーレーン戦よりはるかにまとまりがある。特にGKの秋吉が再三のノーマークを止め絶好調、15分まで失点2に止める。

その後も日本は堅い守備と流れの良いパスワークでノーマークをつくり、堀田、酒巻、河原らで加点、セーフティリードを奪い、断然優位の展開で前半を終了する。

後半、中山が加入、しかし反則から退場者が多く出て今ひとつ調子に乗らない。11分過ぎ、日本は速攻を出し、これを玉村が鋭いロングシュートで決め、ようやく活気を取り戻す。

その後も速攻や中山の大砲が炸裂し大きくリード、2次予選リーグ2勝目をものにした。

秋吉の好守が特に目立った試合だった。

日本25（12－9、13－10）19クウェート

エース玉村が調子を取り戻し、チームも徐々に本来のペースが出て来ている。まず玉村から首藤に渡り、ロングシュートでまず1点、続いて好守備から速攻でPT、これを山村が確実に決めて3－1、続けて玉村が豪快にステップロングシュートをたたき込んで4－1と全く危げないスタートを切る。

しかし、クウェートも10分過ぎた頃から調子を上げ、高く跳ぶジャンプやフェイクを使ってゆさぶり、ミドルやポストで得点して応戦する。17分過ぎたあたりで6－5と差が詰まり、またまた苦戦となるが、日本は右サイドを攻め、好調な堀田の活躍で10－7とする。その後クウェートは執拗に食い下がる。前半の終盤、クウェートの得たPTをGK橋本が好捕し、それを速攻につなげて、1点差となる場面を12－9と3点差とし、後半を楽にさせた。

後半には中山を起用、日本ボールから簡単に中山が得点し、その差を4点とする。クウェートもポスト、サイド、さらに豪快なロングシュートをおりまぜて反撃する。これを必死に突き放そうとする日本は、負傷欠場していた主将・田口も投入するが、いまひとつ冴えがない。

残り5分でクウェートのエースが退場、そこで中山のロング、堀田のサイドなどで加点、6点差としてようやく勝負を決めた。

GK橋本が再三のピンチを救ったのと要所で炸裂した大砲・中山のシュートが目立った。

カタール23（11－12、12－9）21バーレーン

〔順位〕①日本②カタール③バーレーン④クウェート

▼II組

中国40（19－9、21－10）19タイペイ

韓国38（16－6、22－8）14アラブ首長国

中国26（12－10、14－8）18アラブ首長国

韓国47（26－6、21－11）17タイペイ

韓国35（18－10、17－13）23中国

アラブ首長国28（15－15、13－13）28タイペイ

〔順位〕①韓国②中国③アラブ首長国④チャイニーズタイペイ

◆**9～12位予備戦**

サウジアラビア26（10－9、16－13）22シリア

北朝鮮33（17－15、16－17）32イラン

男子

第6回アジア選手権大会成績

◆11〜12位決定戦

イラン 26（16―12、10―13）25 シリア

◆9〜10位決定戦

北朝鮮 37（15―13、15―17、4―1、3―5）36 サウジアラビア

◆7〜8位決定戦

タイペイ 28（12―10、16―14）24 クウェート

◆5〜6位決定戦

バーレーン 24（11―13、13―9）22 アラブ首長国

◆準決勝

日本 26（15―9、11―9）18 中国

玉村、酒巻、首藤、堀田、荷川取で攻撃はスタート。

まず荷川取がポストで強引に打ち先取点、ベテランの味を見せる。対する中国もポストやサイドで応戦し、3―3の同点と開始早々から激しい試合展開となる。その後、中国が速攻ミスなどで足踏みする間に酒巻らのロングなどで3点差と突き放し、さらにはこの日も絶好調の玉村が得意のロングを決め断然優位に立つ。13分で9―4とする。その後も好調は続き、前半を15―9で折り返す。

後半開始早々、中国は連取して差を詰めようとするが、ミスが続いた。それを巧みに日本がつないでよく走り、堀田、玉村、それに正確さで定評のある酒巻らのシュートで残り10分に9点差とし、完璧な試合運びをする。

そして、さらに玉村がセンターからロングを決め、とどめをさした。日本のバックの守備も良かったが、何んといってもGK橋本の守りが抜群で、再三のピンチをしのいで追い上げを許さなかった。

韓国 32（16―10、16―9）19 カタール

◆3〜4位決定戦

中国 29（14―10、15―7）17 カタール

◆決勝

韓国 27（13―8、14―15）23 日本

前回のソウル五輪予選では、地元韓国は出場権があったため、アジア選手権兼ソウル予選では、男女共中国にターゲットを絞っての大会だった。

男子は見事、中国を破って連続5度目の五輪切符を手中に収めたが、女子は大接戦の末涙を飲んだ。つい先日のことのようだ。

あれから4年、女子は何んと9年振りに中国を破り、堂々の準優勝だった。しかし、韓国の壁は厚く、接近はしたものの、またしても追い越すことは出来なかった。

充分なトレーニングを積んだ。津川監督のアイデアで多くの体験もした。ヨーロッパで技術やゲーム慣れもした。USAカップで大きな自信もつけた。

この一戦のためにスタッフも選手たちも多くの生活上の犠牲もあったであろう。

両者共に緊張気味でスタート。

しかし、韓国の2、3人の選手に多少の余裕がみえる。館内われんばかりの大歓声の中、バルセロナに向けてスタート。酒巻、首藤と打つが不発、韓国もポストから決めるがライン。

韓国が姜在源のミドルと趙致孝のサイドと連取して2点目。立ち上がり韓国が断然優位に立つ。日本・中山がステップで決め2―1とする。韓国の攻撃は続く。守備も3―2―1や4―2とフロターディフェンスで変化させる。予選リーグで見せなかったシステムで、日本の玉村、酒巻、中山を苦しめる。このあたりまでは、冷静に展開を読む韓国が有利な試合運びとなる。

日本も残り11分頃、高村がインターセプトから決めて4―7、やや調子は上向きとなる。さらに山村の強烈なロングシュートが炸裂し5―8と詰め寄る。大歓声が巻き起こる。

続いてベテラン高村がサイドから跳び込んでPT、これを山村が決めて大いに日本が燃える。

韓国は、姜在源の好リードと時たま打つ強烈なジャンプシュートで得点を重ね、13―8として前半を終了する。

後半、日本は山村を投入、韓国10番のロングを橋本が好捕、これを後半期待の山村にロングパス、

独走する山村はこれを大きくジャンプし、鮮やかに決める。ここで館内は沸きに沸く。

その後も韓国退場の間、日本も全力を振り絞って対抗するが、5点差がどうしても縮まらない。

日本は、ここで思い切った策に出た。酒巻、山村、そして首藤とつないでスカイプレーである。これがPTとなり、山村が決め3点差となった。その直後、韓国にもPT、これを多くの場面で再三のピンチを救ってきた名GK橋本がとった。

残り5分、4点差と韓国がリード。しかし、日本も最後の力を振り絞って追い上げ4分で3点差。続いて首藤が好守備からインターセプト、これをドリブルで独走、強烈なシュートで決めて2点差と大きなチャンス。しかし、日本に凡ミスが出たり、ミドルを打たれ万事休す。長い、そして熱い戦いは終った。

〔最終順位〕①韓国②日本③中国④カタール⑤バーレーン⑥アラブ首長国⑦チャイニーズタイペイ⑧クウェート⑨北朝鮮⑩サウジアラビア⑪イラン⑫シリア

◆決勝戦◆

［日本］

No.	氏名	得点
3	玉村 健次	7
4	荷川取 義浩	1
6	酒巻 清治	0
7	河原 隆雅	0
9	山村 敏之	5
10	首藤 信一郎	2
11	斉藤 慎太郎	0
12	橋本 行弘	0
13	高村 誠一	2
14	堀田 敬章	3
15	中山 剛	3
16	秋吉 哲男	0
	得点計	23

［KOR］

No.	氏名	得点
3	Cho Bum-yun	4
4	Park Do-hum	2
5	Lim Jin-suk	2
6	Cho Young-shin	3
7	Baek Sang-suh	0
8	Jung Kang-uk	1
10	Cho Chi-hyo	6
12	Choi Suk-jae	0
13	Kang Jae-won	8
14	Moon Byung-uk	1
15	Shin Jae-hong	0
16	Lee ki-ho	0
	得点計	27

予選第一次リーグ

＜日本＞

No.	氏名	得点
1	矢内 浩	0
3	玉村 健次	4
4	荷川取 義浩	0
6	酒巻 清治	5
7	河原 隆雅	3
9	山村 敏之	4
10	首藤 信一郎	3
11	斉藤 慎太郎	1
12	橋本 行弘	0
13	高村 誠一	1
14	堀田 敬章	3
15	中山 剛	4
	得点計	28

＜SAU＞

No.	氏名	得点
1	M.Mersal	0
2	A.Al-Serihi	3
3	A.Ibrahim	1
4	Y.Al-Harbi	1
5	A.R.Barnawi	0
7	B.Al-Harbi	0
8	A.Elewat	3
10	S.Al-Turegee	0
12	H.Roshid	0
13	S.Al-Romehi	0
14	M.Aseri	0
15	M.Al-Ghamdi	0
	得点計	8

予選第一次リーグ

＜TPE＞

No.	氏名	得点
1	Song Lian Jong	0
2	Chen Muh Huoo	0
3	Su Jui Chang	7
5	Wen Ting Hsian	0
6	Chiu Chun Lung	2
7	Nia Kuan In	1
8	Wu Chi Che	0
9	Lee Tian Hao	3
10	Tsay Horng Lia	0
11	Chang I Chiang	1
12	Jao Chih Chien	0
13	Cheng Ta Cheng	2
	得点計	16

＜日本＞

No.	氏名	得点
1	矢内 浩	0
2	田口 隆	0
3	玉村 健次	5
4	荷川取 義浩	2
6	酒巻 清治	1
7	河原 隆雅	5
10	首藤 信一郎	5
11	斉藤 慎太郎	2
12	橋本 行弘	0
13	高村 誠一	1
14	堀田 敬章	4
15	中山 剛	4
	得点計	29

予選第二次リーグ

＜日本＞

No.	氏名	得点
1	矢内 浩	0
3	玉村 健次	2
4	荷川取 義浩	0
6	酒巻 清治	1
7	河原 隆雅	2
9	山村 敏之	7
10	首藤 信一郎	3
11	斉藤 慎太郎	0
12	橋本 行弘	0
13	高村 誠一	0
14	堀田 敬章	6
15	中山 剛	4
	得点計	25

＜BRN＞

No.	氏名	得点
1	M.A.Ali	0
3	A.M.Essa	1
4	J.A.Abdulla	0
6	A.A.R.Al-Shaik	0
10	S.J.Mohammed	12
11	Y.A.Hussain	1
12	M.A.Mohammed	0
14	A.G.M.Abdulla	2
15	S.A.S.Al-Falah	2
17	W.A.L.Al-Amer	0
19	R.S.Buhamood	0
20	I.B.Haji	3
	得点計	21

予選第二次リーグ

＜QAT＞

No.	氏名	得点
1	N.S.Al-Jaroof	0
2	J.S.Al-Saei	0
3	M.F.M Ali	0
6	B.A.S.Mubrak	2
7	A.B.S.Khalifa	2
10	S.S.S.Al-Nassr	3
11	K.S.B.A.Al-Kuw	0
12	M.A.M.Saeed	0
13	R.M.M.Kahora	1
14	H.A.R.Al-Romai	1
15	Z.T.J.Mubaran	1
20	T.M.Aman	0
	得点計	10

＜日本＞

No.	氏名	得点
3	玉村 健次	9
4	荷川取 義浩	1
6	酒巻 清治	4
7	河原 隆雅	1
8	甲斐 章義	1
10	首藤 信一郎	1
11	斉藤 慎太郎	0
12	橋本 行弘	0
13	高村 誠一	1
14	堀田 敬章	2
15	中山 剛	4
16	秋吉 哲男	0
	得点計	24

予選第二次リーグ

＜KUW＞

No.	氏名	得点
4	M.Abdulla	3
5	S.Al-Tubikh	0
6	W.Al-Hajraf	8
7	S.Al-Marzooq	1
8	T.Mohammed	4
9	H.Abdull Reda	1
11	N.Fahim	1
12	A.R.Buloushi	0
13	A.Al-Amer	0
15	M.Al-Marzooq	0
16	K.Al-Marzooq	0
20	R.Al-Zaabi	1
	得点計	19

＜日本＞

No.	氏名	得点
1	矢内 浩	0
2	田口 隆	1
3	玉村 健次	4
4	荷川取 義浩	0
6	酒巻 清治	1
7	河原 隆雅	3
9	山村 敏之	2
10	首藤 信一郎	2
12	橋本 行弘	0
13	高村 誠一	1
14	堀田 敬章	8
15	中山 剛	3
	得点計	25

準決勝

＜日本＞

No.	氏名	得点
2	田口 隆	0
3	玉村 健次	8
4	荷川取 義浩	1
6	酒巻 清治	4
7	河原 隆雅	2
10	首藤 信一郎	0
11	斉藤 慎太郎	1
12	橋本 行弘	0
13	高村 誠一	0
14	堀田 敬章	7
15	中山 剛	3
16	秋吉 哲男	0
	得点計	26

＜CHN＞

No.	氏名	得点
2	Liu Dianfang	3
3	Ma Haiyong	1
5	Gao Hengqin	1
6	Zhang Jingmin	2
7	Yan Tao	1
8	Liu Dedong	2
11	Zhang Hongjun	0
12	He Jun	0
13	Wang Xindong	8
14	Mo Zhujian	0
15	Guo Weidong	0
16	Wang Xia	0
	得点計	18

女子

第3回アジア選手権大会成績

◆リーグ戦

日　本 36 〔18―10／18―8〕 18 タイペイ

アジア選手権のオープニングゲームは、日本対チャイニーズタイペイの組合せとなった。

日本チームは緊張のためか足が動かず、2分までにいきなり3点をリードされ不安感がのぞく。しかし、気力、体力、技術は、日本の方があきらかに上。日本がリードを奪ったのは10分過ぎから。コンビネーションを基本とした攻撃で着々と加点し、8点差で前半を終了する。

後半、チャイニーズタイペイは10番をリードオフマンとするずらし攻撃の展開から、時折縦ブロックを使って攻撃するが、総合的に力が劣るためにミスを多発し、試合は完全に日本のペースとなり、ダブルスコアで第一戦を飾った。

日　本 23 〔10―8／13―6〕 14 北朝鮮

朝鮮民主主義人民共和国（以下PRK）は、スケールは大きくないもののスピード豊かな経験を持ち、右45度に左腕のアン・ジョンオフ、センターにソン・ヨンエ、左45度に171cmのスピードシュート力のあるホ・ミョンスクを配するずらし攻撃を主体とするチームである。

日本は1・5ディフェンスで対抗するが、前半は右45度にトップがふられミドルシュートをセンターに決められ、20分過ぎまで一進一退。前半ノータイム寸前、日本は襃川がフリースローを決め10―8の2点差をつけて終了。

後半、日本は6・0のディフェンスをしいてPRKのずらしからのカットインに対抗する策が成功。また、ポイントゲッターのホ・ミョンスクが失格となり、PRKは全くペースを崩してしまった。

GK村山の好プレーに助けられる場面はあったものの、上村をリードオフマンとする日本は、攻撃のリズムも良くなり、速攻、サイド、ロング、ポストとまんべんなく得点を重ねて危げなく勝利をものにすることができた。

韓　国 27 〔11―7／16―11〕 18 中　国

中　国 38 〔15―7／23―11〕 18 タイペイ

韓　国 36 〔17―11／19―8〕 19 北朝鮮

韓　国 33 〔16―11／17―14〕 25 日　本

日本は大会直前に捻挫していた守りの柱の尾苗を復帰させて6・0の防御をしいて韓国のサイドプレーとカットインに対抗。立ち上がり4分までに1本もシュートを打てずミスを重ねているうちに、韓国は速攻、ロング、サイドと決めていきなり3―0とリードされる。その後、丸田のロングが決まるも、10分で2―8と一方的にリードを奪われた。

前半15分から25分の間に4―10から10―12まで、丸田や襃川などのフリースローやロングで得点を重ねた場面や、後半開始早々、西村のポストや丸田のロングで詰め寄った場面以外は、常時5～6点リードを奪われたままでゲームを終了した。

日本は、一時に比較してチーム力も上がり、韓国をあわてさせる場面も出て来たが、韓国のシュートをねらっての鋭いカットインとずらし、また、ずらしからの切り返しは、日本のディフェンスを翻弄した。150日余の合宿で、日本は戦力も上がりたくましくなったが、個人の基礎技能はまだ対等とはいえない。それは、ゲーム場面において攻撃のミスとなって現われ、パスミスなど韓国より8個も多く、それが相手の速攻を引き出す結果となった。韓国はこの試合で11本速攻を決めたが、日本は僅か2本にとどまっている。GK

リーグ戦第一戦

	背番号	氏名	得点
<日本>	1	川島ゆう子	0
	3	梅原　直美	7
	4	丸田　紀子	4
	5	松沢　祐子	2
	8	上村多恵子	2
	9	褒川亜由美	6
	10	小池美由紀	0
	11	市来未央子	4
	14	西村　朋子	1
	15	比嘉　晴美	5
	16	村山みどり	0
	19	谷本　泉	5
		得点計	36
<TPE>	1	Chou Mei Chen	0
	2	Wu Chun Chin	2
	3	Chi Hsueh Ni	0
	5	Yang Shu Hua	1
	6	Chang Yi Weng	0
	10	Chang Shau Chi	7
	11	Hung Shu Fang	1
	12	Lee Chi Chen	0
	13	Fu Ching Tzu	1
	14	Chang Shu Fen	0
	15	Yao Li Chun	1
	17	Chang Ming Yu	5
		得点計	18

リーグ戦第二戦

	背番号	氏名	得点
<PRK>	1	Pak Chun Bok	0
	2	Che Chun Bok	1
	3	Li Hyon Sil	0
	4	Hang Song Suk	0
	5	Li Hui Ok	0
	8	Li Mi Gyong	0
	10	Kim Yong Ran	1
	11	Ho Myong Suk	3
	12	Li Jong Ae	0
	13	An Jong Ok	5
	14	Son Yong Ae	4
	15	Kim Ok Jol	0
		得点計	14
<日本>	1	川島ゆう子	0
	3	梅原　直美	1
	4	丸田　紀子	3
	6	松田　史佳	2
	8	上村多恵子	4
	9	褒川亜由美	3
	10	小池美由紀	0
	13	小野寺かおる	1
	14	西村　朋子	4
	15	比嘉　晴美	5
	16	村山みどり	0
	18	木口ゆかり	0
		得点計	23

リーグ戦第三戦

	背番号	氏名	得点
<日本>	1	川島ゆう子	0
	3	梅原　直美	3
	4	丸田　紀子	6
	6	松田　史佳	4
	7	尾苗裕美子	0
	8	上村多恵子	2
	9	褒川亜由美	5
	11	市来未央子	0
	14	西村　朋子	1
	15	比嘉　晴美	2
	16	村山みどり	0
	19	谷本　泉	2
		得点計	15
<KOR>	1	Song Ji-Hyun	0
	2	Nam Eun-Young	5
	3	Park Young-Sun	0
	5	Lee Mee-Young	5
	6	Lee Ho-Yun	4
	7	Lim O-Kyung	2
	8	Min Hye-Sook	4
	9	Kim Mee-Shim	1
	10	Oh Sung-Ok	7
	12	Jang Ri-Ra	0
	14	Kim Hwa-Sook	1
	15	Park Kap-Sook	4
		得点計	33

リーグ戦最終戦

	背番号	氏名	得点
<CHN>	1	Wang Yue Hao	0
	2	Zhang Hong	0
	3	He Jian Ping	4
	4	Zhang Li Mei	1
	6	Wu Xin	0
	7	Zai Cao	1
	8	Chen Zhen	2
	9	Xie Mei Ping	0
	14	Jiang Yin Juan	2
	15	Lu Guang Hong	2
	16	Wang Tao	0
	17	Shi Wei	6
		得点計	18
<日本>	1	川島ゆう子	0
	3	梅原　直美	6
	4	丸田　紀子	2
	6	松田　史佳	0
	7	尾苗裕美子	0
	8	上村多恵子	0
	9	褒川亜由美	2
	10	小池美由紀	1
	14	西村　朋子	1
	15	比嘉　晴美	2
	16	村山みどり	0
	19	谷本　泉	6
		得点計	20

女子

第3回アジア選手権大会成績

北村もよくシュートを阻止したが、決定的な差はミスと速攻であった。

北朝鮮 28 (16－13 / 12－14) 27 タイペイ
中国 27 (13－8 / 14－11) 19 北朝鮮
日本 20 (7－8 / 13－10) 18 中国

この試合は、韓国がチャイニーズタイペイに大敗することは考えられず、バルセロナ・オリンピックへの道は事実上閉ざされているとはいえ、異例の長期合宿の成果とアジアにおける日本の地位を問う大事な一戦。

日本は、小池をトップに1・5ディフェンスをしいて大型であるとはいえ、今一つスピードとコンビネーションに欠ける中国に備える。中国は182cmの張をディフエンスの要として中央に170cm台をそろえて6・0防御をしく。

今大会での実力は全くの互角で、当日の出来次第で勝敗が決まるという予想である。試合開始早々、蒋(175cm)にロングを決められ、またPTを石(175cm)に決められ5分で2－0となる。しかし、この日の日本は実にキビキビとした動きをみせる。大観衆の声援にも支えられ一歩も引く様子がない。長身の6・0防御の前にロングが決まらず苦しむが、ミスを拾っての速攻、速攻がらみのPTがよく決まった。それに対し中国は、陳、石、蒋のロングをねらいながらの展開で対抗。一進一退の8－7と中国の1点リードで前半を終了する。

後半立ち上がり裴川のロングが決まり8－8の同点となり、滑り出しの良い出足となった。日本はディフェンスシフトを6・0に変化して中国の攻撃をおさえる作戦。中国は長身を生かしてロングを打ってくるが、村山の好キープに阻まれ得点がなかなか伸びない。もたもたしている間に日本は、比嘉、谷本のサイド、丸田のロングを含めて後半21分には3点のリードを奪う。

その後、石やベテラン何に決められて、26分には18－18のタイスコアとなる苦しい闘いとなる。しかし地の利を得た日本は、終盤、相手のミスを立て続けに谷本、西村が速攻で決め、大観衆の熱烈な声援の中で、劇的で貴重な、将来に希望の灯のともる1勝を得ることができた。中でも、速攻、サイドシュート(6本)をすべて決めた谷本、PT5本をすべて決めた梅原の活躍は光った。

韓国 39 (24－8 / 15－12) 20 タイペイ

【最終順位】①韓国②日本③中国④朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)⑤チャイニーズタイペイ(タイペイ)

図９　各チームの最も多く得点をあげた区域

であることは言うまでもなく、各国ともシュートを成功させ得点に結び付ける研究が積極的に進められている。

本大会のシュート成功率（図８）をみると、男子１位のスウェーデン56％、女子１位の韓国52％であり、1988年ソウル・オリンピック女子のシュート成功率からの順位をみても、50％に達していないチームは、上位に進出していない。このことからも、最終段階のシュートに到達する前の、基本的な動きの技術を身につけることが重要となる。競技の終始を通じてよく動き、よく走り、スピーディな試合展開のできる基礎的な体力も大切な要素である。

V　まとめ

近年のハンドボール競技は、スピードが一段とアップされ、それと同時に運動強度も増加の傾向にあることから、ゲームを有利に進めるうえにも、60分間へばることなく、相手の動きに対応できる有酸素パワーや、短時間に一度に爆発的な力を出すことのできる無酸素パワーも併せて有していなければならない。以上の考え方から、攻撃や防御を行うためにも、不規則な連続的な動きとしての走力が要求されてこよう。

スポーツ競技で最高能力を発揮するためには、精神×技術×体力の三者を併せて充実させるトレーニングを積極的に行うことが急務である。

〔文献〕

１）阿部徳之助、松井幸嗣、北川勇喜、竹内正雄、森川寿人、申吉洙、西山逸成：1988年ソウル・オリンピック出場の女子ハンドボールチームのゲーム分析。日本ハンドボール機関誌。12—16．1990．

２）水上一、大西武三、河村レイ子、土井秀和、笹倉清則：世界のトップレベルチームの技術・戦術的分析。日本体育学会。P387．1986．

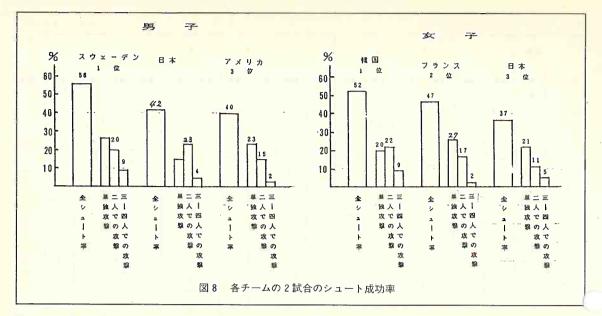
３）松井幸嗣、北川勇喜、藤原侑、上嶋美佐子、斎藤慎太郎、阿部徳之助、竹内正雄、西山逸成、森川寿人：ハンドボールのゲーム分析―ソウル・オリンピック男子チームを対象として―。日本体育学会。P619．1989

４）第20回ミュンヘン・オリンピック日本代表選手体力測定報告。昭和47年度日本体育協会スポーツ科学研究報告。１—98．1972．

５）第21回モントリオール・オリンピック大会日本代表選手体力測定報告。昭和50年度日本体育協会スポーツ科学研究報告。１—107．1976．

６）わが国における代表的な競技選手についての健康診断・体力測定報告。昭和55年度日本体育協会スポーツ科学研究報告。１—47．1980．

７）第23回ロサンゼルス・オリンピック大会日本代表選手健康診断・体力測定報告。昭和59年度日本体育協会スポーツ科学研究報告。１—62．1984．

図８　各チームの２試合のシュート成功率

は０点である。得点時の攻撃パターンでは（表６）、単独攻撃30%、２人の攻撃23%、３～４人の攻撃30%であった。

得点時の攻撃パターンをみると、単独攻撃45%、２人の攻撃55%、３～４人の攻撃30%であった。（表７）

(3)各国の順位別傾向

図８は、男女の成績順位別による各チームの２試合平均のシュート成功率と得点時の攻撃パターンを示したものである。

（ア）男子

１位スウェーデンのシュート成功率56%、２位日本42%、３位アメリカ40%であった。得点時にどのような攻撃パターンであったかをみると、単独攻撃27%、２人の攻撃20%、３～４人の攻撃９%の順である。

日本は、２人の攻撃23%、単独攻撃15%、３～４人の攻撃４%、アメリカは、単独攻撃23%、２人の攻撃15%、３～４人の攻撃２%であった。

（イ）女子

１位の韓国のシュート成功率は52%、２位フランス47%、３位日本37%であった。得点時の攻撃パターンでは、韓国は２人の攻撃22%、単独攻撃20%、３～４人の攻撃９%の順であった。フランスは、単独攻撃27%、２人の攻撃17%、３～４人の攻撃２%、日本は、単独攻撃21%、２人の攻撃11%、３～４人の攻撃５%であった。

Ⅳ　考察

１．体格

ハンドボール競技の特性からみても長身者は有利であることは否定できない。各国とも近年大型化のチームづくりを目指した強化策を進めている。

(1)男子

今回のジャパンカップ出場チームの身長は世界のトップクラスであるスウェーデンで、最も高い選手は199cm、まさに世界のハンドボールは、"高さとパワーのハンドボール"という現状を認識せざるを得ない。

日本とスウェーデンとの比較では、有意（P<0.05）にスウェーデンが高い。

ミュンヘン・オリンピック（1972年）[4,5,6,7]の初出場以降から1990年ジャパンカップの18年間の日本チームの平均身長は僅か５cmの増加を示すにすぎない。

(2)女子

フランスの185cmが最も身長が高く、男子と同様に女子でも長身者は有利であることはいうまでもない。日本がフランスや韓国よりも有意（P <0.05）に低く、モントリオール・オリンピック出場（1976年）初出場以降から本大会の14年間、３cmの増加で男女とも今後も身長の増加に大きな期待はできないと考えられる。

1988年ソウル・オリンピックでは、男女の韓国チームのすばらしい活躍があった。そのなかで、女子金、男子銀メダルはアジアで初めてのメダルの獲得であった。

特に韓国の女子は、８チーム出場中、６番目に身長（168.5±5.6cm）が低い。その身長の劣勢を基礎体力づくりに充分に時間をかけたことが好結果につながった要因の一つであったとしている[1]。

日本が世界のトップクラスを占める条件の一つには大型チームづくりが急務であろう。その対策として、列強国が長年着手してきたような、長身選手のジュニアを発掘し、長期間にわたる継続的・計画的な基礎体力トレーニングを実行することが不可欠の条件である。

２．ゲーム分析

(1)男子

得点の多い区域はＢ、Ｃ、Ｄ区域で全得点の43%から80%で、各国は中央付近からの得点を多くあげていることが明らかになった。この区域からのシュートを成功させるために各チームは、この区域での激しい攻防戦を展開している。

各国の最も多く得点をあげた区域をみると（図９），日本はＣ区域の中央、スウェーデンは、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｇ区域の右側、アメリカはＣ、Ｄ区域の右側とそれぞれ各チームの得点の範囲特徴をみることができる。

(2)女子

得点の最も多い区域は、男子と同様にＢ、Ｃ、Ｄ区域で、全得点の48%から86%であった。

各国の最も多く得点をあげた区域をみるとフランスはＣ区域、日本はＣ区域の狭い部分であり、韓国は、Ｃ、Ｄ区域の右側からそれぞれ得点をあげている。

日本チームの対策として全区域、特に両サイドに得点できる技術が男女に必要である。

ハンドボール競技は得点を競う競技

表6　得点したときの攻撃パターン

女子（日本対韓国）

区域		A		B		C		D		E		F		G		H		
チーム名	攻撃の人数	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	小計 %
日本	1人	%	0 0/1			66 4/6	37 3/8		40 2/5		0 0/2	0 0/1	0 0/1		0 0/5	0 0/1		30.0 9/30
	2人	%			0 0/2	0 0/1	42 3/7		0 0/5					0 0/1	100 1/1			23.0 4/7
	3~4人	0% 0/1			0 0/1		33 2/6		0 0/1						100 1/1			30.0 3/10
韓国	1人	%		33 1/3	75 3/4	100 1/1	50 1/2	100 1/1	75 3/4				0 0/2		0 0/3	0 0/1	0 0/1	45.0 10/22
	2人	100% 3/3	100 2/2		100 1/1	50 1/2	57 8/14		0 0/2		25 1/4				0 0/1			55.0 16/29
	3~4人	%	0 0/1								100 1/1							50.0 1/2

表7　対戦チームの身長、年齢、攻撃回数のシュート率、技術的ミス、シュート成功率

		身長	年齢	①攻撃回数に対するシュート率			②攻撃回数に対する技術的ミス率			③シュートの成功率		
		(cm)	(才)	前半(%)	後半(%)	計(%)	前半(%)	後半(%)	計(%)	前半(%)	後半(%)	計(%)
男女	アメリカ	188±7.5	23.4±2.9	73	68	71	26	32	29	38	67	51
	スエーデン	191±7.9	23.6±1.9	74	69	72	16	31	24	68	53	62
	スウーデン	191±7.9	23.6±1.9	79	88	84	21	12	17	48	59	53
	日本	184±4.0	25.5±2.4	79	82	81	21	18	20	54	43	49
	日本	184±4.0	25.5±2.4	68	69	68	12	17	15	55	50	53
	アメリカ	188±7.5	23.4±2.9	88	83	85	32	31	31.5	47	50	49
女子	韓国	171±5.0	20.2±2.2	83	78	83	12	22	18	43	60	51
	フランス	172±4.8	23.0±2.4	82	72	77	18	28	23	54	50	52
	日本	165±5.3	21.2±1.3	75	82	78	25	18	21	54	33	43
	フランス	172±4.8	23.0±2.4	69	84	77	31	16	23	39	59	50
	日本	165±5.3	21.2±1.3	71	87	79	29	13	22	22	36	29
	韓国	171±5.0	20.2±2.2	70	79	75	30	21	25	67	41	54

図7—2　ポジション別によるシュート成功率

表5　得点したときの攻撃パターン　　　　　女子（日本対フランス）

区域		A		B		C		D		E		F		G		H		
チーム名	攻撃の人数	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	小計 %
日本	1人	0X 0/1	50 1/2	100 1/1	40 2/5	100 2/2	0 0/4	100 1/1	100 5/5		0 0/2							52.0 12/23
	2人	X	0 0/1		0 0/1	100 3/3	18 2/11		50 1/2		0 0/2		100 1/1		0 0/2			30.0 7/23
	3~4人	X	0 0/1												100 1/1		100 1/1	67.0 2/3
フランス	1人	0X 0/1	100 3/3	60 2/3	100 2/2	60 3/5	25 1/4	0 0/1	20 1/5	100 1/1	50 1/2		100 1/1		0 0/1			52.0 15/29
	2人	X	25 1/4		100 1/1	50 1/5			0 0/1	0 0/1	0 0/1				0 0/1			27.0 3/11
	3~4人	X																0 0/0

表５　得点したときの攻撃パターン

女子（日本対フランス）

区域		A		B		C		D		E		F		G		H		
チーム名	攻撃の人数	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	小計 %
日本	1人	0% 0/1	50 1/2	100 1/1	40 2/5	100 2/2	0 0/4	100 1/1	100 5/5		0 0/2							52.0 12/23
	2人	X	0 0/1		0 0/1	100 3/3	18 2/11		50 1/2		0 0/2		100 1/1		0 0/2			30.0 7/23
	3~4人	X	0 0/1												100 1/1		100 1/1	67.0 2/3
フランス	1人	0% 0/1	100 3/3	60 2/3	100 2/2	60 3/5	25 1/4	0 0/1	20 1/5	100 1/1	50 1/2		100 1/1		0 0/1			52.0 15/29
	2人	X	25 1/4		100 1/1	50 1/5			0 0/1	0 0/1	0 0/1				0 0/1			27.0 3/11
	3~4人	X																0 0/0

図７－１　攻撃回数に対するシュート率、技術的なミス率、シュート成功率

図6—1　攻撃回数に対するシュート率、技術的なミス率、シュート成功率

図6—2　ポジション別によるシュート成功率

得点時の攻撃パターンでは（表5）、単独攻撃52%、2人の攻撃30%、3～4人の攻撃67%であった。

これに対して、フランスはC、B、A区域からの得点が多く、全得点の60%にも達し、全区域から得点をあげている。

得点時の攻撃パターンでは、単独攻撃52%、2人での攻撃27%であった。

〔日本対韓国〕

攻撃回数に対するシュート率（図7—1）では、日本は79%、韓国75%であった。

技術的なミス率をみると、日本20%韓国25%で、シュート成功率では、日本31%、韓国54%で、日本が韓国よりも23%も低い。

ポジション別のシュート成功率では（図7—2）、日本は、C区域が最も多く得点をあげ、全得点の65%を占め、狭い区域からの得点でA、B、E区域

図５－２　ポジション別によるシュート成功率

注：上段の％は区域内値
下段は全シュート率からみた％

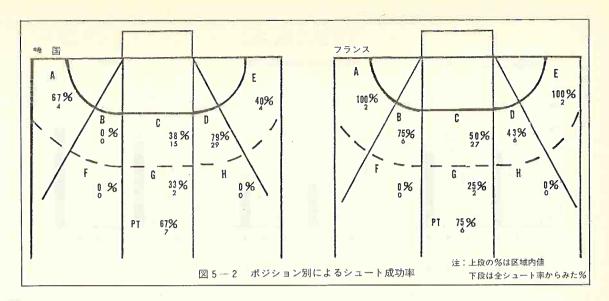



表４　得点したときの攻撃パターン

女子（韓国対フランス）

区域		A		B		C		D		E		F		G		H		
チーム名	攻撃の人数	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	小計 %
韓国	1人	%	0 0/1		0 0/2	50 2/4	30 3/10	100 1/1	60 3/5	0 0/1				100 1/1				40.0 10/25
	2人	%	100 1/1		0 0/1	0 0/2	33 1/3	100 2/2	66 2/3		33 1/3				0 0/1			44.0 7/16
	3~4人	100% 1/1					100 2/2		100 3/3		100 1/1				0 0/1			88.0 7/8
フランス	1人	%			50 1/2	33 2/6	37 3/8		25 1/4					100 1/1			0 0/1	36.0 8/22
	2人	%	100 1/1		100 1/1	100 3/3	57 4/7		66 2/3		100 1/1				0 0/3			63.0 12/19
	3~4人	%			100 1/1		50 1/2											67.0 2/3

表３　得点したときの攻撃パターン　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　男子（アメリカ対日本）

区域		A		B		C		D		E		F		G		H		
チーム名	攻撃の人数	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	小計 %
アメリカ	1人	%	33 1/3			0 0/1	33 2/6		50 1/2		66 2/3						0 0/1	38.0 6/16
	2人	%				60 3/5	50 1/2		75 3/4		50 1/2				0 0/1			57.0 8/14
	3~4人	%					33 1/3											33.0 1/3
日本	1人	%		0 0/1	50 3/6		27 3/11	0 0/1	0 0/1		0 0/1			100 1/1				32.0 7/22
	2人	%		100 1/1	100 2/2		66 2/3		80 4/5	0 0/1			100 1/1					77.0 10/13
	3~4人	%			50 1/2		0 0/1		100 1/1						0 0/2			50.0 3/6

ターンでは、単独攻撃32%、２人の攻撃77%、３～４人の攻撃50%であった。

(2)女子

〔韓国対フランス〕

攻撃回数に対するシュート率（図５—１）は韓国83%、フランス77%、攻撃回数に対する技術的なミス率は韓国18%、フランス23%であった。さらにシュート成功率は韓国51%、フランス52%でほぼ同じ値を示している。

ポジション別からのシュート成功率（図５—２）をみると、韓国はＤ、ＣＥの右側からの得点が多く見られ、これらは全得点の94%を占めている。得点時の攻撃パターンをみると（表４）、単独攻撃40%、２人の攻撃44%、３～４人の攻撃88%で、攻撃人数が多いほど得点をあげる率が高い傾向にある。

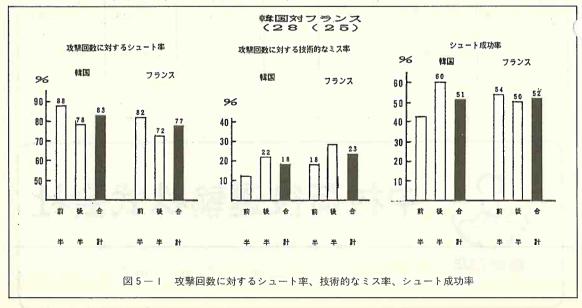
これに対してフランスはＣ、Ｂ、Ｄの区域からの点が多く、得点時の攻撃パターンでは（表４）、単独攻撃37%、２人の攻撃63%、３～４人の攻撃67%であった。

〔日本対フランス〕

攻撃回数に対するシュート率（図６—１）は日本78%、フランス77%であった。攻撃回数に対する技術的なミス率は、日本21%、フランス23%でほぼ同じ値を示している。

シュート成功率では日本43%、フランス50%で、日本がフランスよりも７%低い。

ポジション別からみたシュート成功率では（図６—２）、日本はＣ、Ｄ、Ｂ区域からの得点が多くみられるが、Ｅ区域からの得点がない。

図５—１　攻撃回数に対するシュート率、技術的なミス率、シュート成功率

45%、2人の攻撃70%、3～4人の攻撃100%であった。

〔アメリカ対日本〕

攻撃に対するシュート率(図4—1)は、アメリカ65%、日本85%であった。次に攻撃回数に対する技術的なミス率は、アメリカ32%、日本15%で、日本はアメリカよりも17%ミスが少ない。これをシュート成功率から見ると、アメリカ49%、日本53%であった。

ポジション別によるシュート成功率(図4—2)のアメリカは、C区域の中央からの得点が多く、次にD、Eの右側よりの得点となっている。得点時の攻撃パターンでは(表3)単独攻撃38%、2人の攻撃57%、3～4人の攻撃33%であった。これに対して日本は、B区域からの得点が多く、次にC、D区域で、これらの区域からの得点は、全体の70%を占めている。しかし、両サイドの得点はない。得点時の攻撃パ

図4—1 攻撃回数に対するシュート率、技術的なミス率、シュート成功率

図4—2 ポジション別によるシュート成功率

図３－２　ポジション別によるシュート成功率

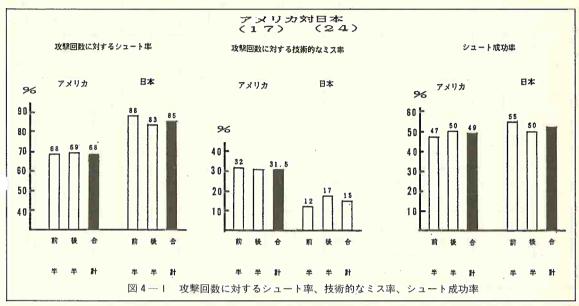
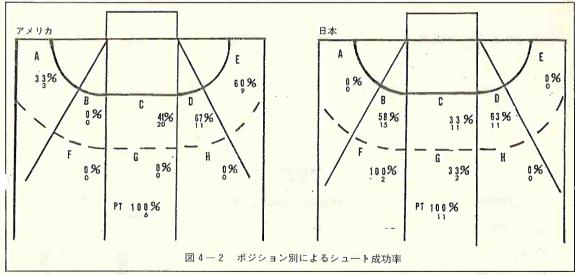
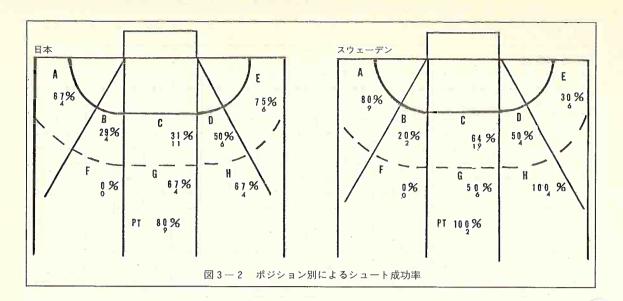



表２　得点したときの攻撃パターン　　　　男子（日本対スウェーデン）

区域		A		B		C		D		E		F		G		H		
チーム名	攻撃の人数	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	小計 %
日本	1人	100% 1/1			20 1/5	0 0/2	25 1/4	100 1/1	33 1/3							50 1/2		33.0 6/18
	2人	%	0 0/1		50 1/2	100 1/1	37 3/8		50 1/2	50 1/2					50 1/2	100 1/1		47.0 9/19
	3~4人	%	100 1/1				0 0/1				100 2/2				100 1/1			80.0 4/5
スウェーデン	1人	%	66 2/3	0 0/2	0 0/1	100 4/4	37 3/8	0 0/1	50 1/2	0 0/1	20 1/5			0 0/1	100 1/1	100 1/1	100 1/1	45.0 14/31
	2人	100% 1/1		50 1/2			100 2/2	100 1/1			33 1/3				100 1/1			70.0 7/10
	3~4人	%	100 1/1								100 1/1				100 1/1			100.0 3/3

表１　得点したときの攻撃パターン　　　　男子（アメリカ対スウェーデン）

区域		A		B		C		D		E		F		G		H		
チーム名	攻撃の人数	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	速攻	遅攻	小計 %
アメリカ	1人	%		100 1/1	57 4/7	100 2/2	50 1/2	100 1/1	0 0/3					0 0/2	0 0/2		0 0/1	43.0 9/21
	2人	100% 1/1	33 1/3		100 2/2	66 2/3		100 2/2	100 1/1				0 0/2	0 0/1	100 1/1			63.0 10/16
	3~4人	%							0 0/1									0 0/1
スウェーデン	1人	%		0 0/1	0 0/2	80 4/5	100 1/1	100 1/1	0 0/4	0 0/1		50 1/2		66 2/3	0 0/1		0 0/1	41.0 9/22
	2人	100% 1/1	100 1/1		100 2/2		66 2/3	100 1/1	33 1/3						100 1/1			75.0 9/12
	3~4人	%			100 2/2						100 1/1		100 1/1					100.0 4/4

からは０点である。

さらに、得点したときの攻撃の分類別（以後は攻撃パターンを称する）を示した（表１）。

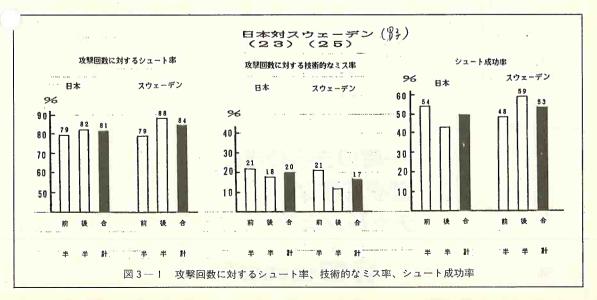
これによると、単独攻撃43%、２人の攻撃63%で、２人のコンビでのシュート成功率が高い。これに対して、スウェーデンのポジション別シュート成功率（図２―２）は、C区域からの得点が最も多く、次にB、DとG区域からのロングシュートの得点であり、全体区域から得点をあげているのが特徴である。得点時の攻撃パターンをみると、単独攻撃41%、２人での攻撃75%、３～４人での攻撃100%で、多人数がボールに関連しているほどシュート成功率が高い値である。

〔日本対スウェーデン〕

攻撃回数に対するシュート率（図３―１）では、日本81%、スウェーデン84%、攻撃に対するミス率は、日本20%、スウェーデン17%であった。次に両チームのシュート成功率をみると、日本49%、スウェーデン53%であった。

ポジション別のシュート成功率（図３―２）の日本は、C区域からの得点が最も多く次にC、Eの右側の区域からとなっている。中央区域から全得点の43%をあげている。得点時の攻撃パターンをみると（表２）、単独攻撃33%、２人の攻撃47%、３～４人の攻撃80%の値を示している。

スウェーデンはC、A、E区域からの得点が多く、中央や両サイドからの得点は全得点の64%にも達している。得点時の攻撃パターンでは、単独攻撃

図３―１　攻撃回数に対するシュート率、技術的なミス率、シュート成功率

ームの男女の身長と年齢を示したものである。

(1)男子ではスウェーデン（４名）が最も高く、次にアメリカ、日本の順である。年齢では、日本25.5±2.4才、アメリカ23.4±2.9才、スウェーデン23.6才±1.9才で、日本が最も年齢が高かった。

(2)女子では、フランス、韓国、日本の順で、日本がフランスよりも７cm低く、年齢をみると、フランス23.0±2.4才、日本21.2±1.3才韓国20.2±2.2才であった。

２．ゲーム分析

(1)男子

〔アメリカ対スウェーデン〕

①攻撃回数に対するシュート率（図２―１）では、スウェーデン72％、アメリカ71％、技術的なミス率では、アメリカはスウェーデンよりも５％多くミスを発生している。これをシュート成功率の前・後半の合計では、スウェーデンは10％高いシュート成功率を示している。

図２―２は、総合点数からみた得点の割合とポジション別のシュート成功率および攻撃方法別（分類：単独攻撃、２人での攻撃、３～４人での攻撃）を示したものである。

※注：攻撃方法による分類

①単独攻撃

遅攻……組織的な攻撃中、１対１、０対１でのシュート

速攻……ＧＫや他のプレーヤーから直接パスされたボールをシュート

②２人での攻撃

遅攻……組織的な攻撃中、最終的に２人が関連したシュート

速攻……２人でボールを運びこんでのシュート

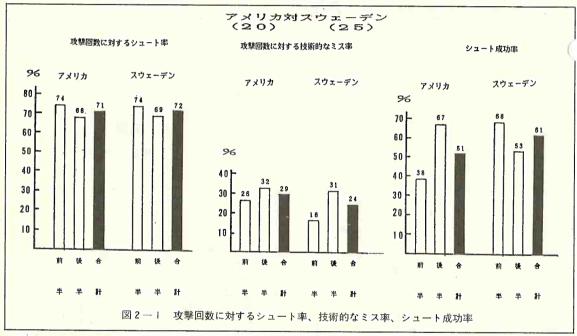
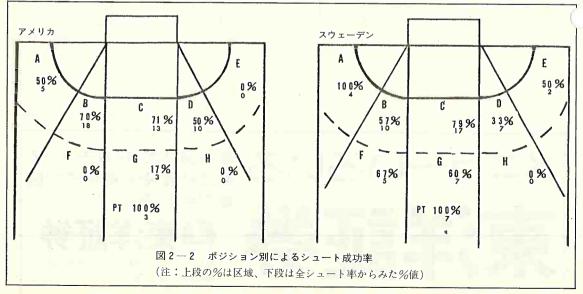
③３～４人での攻撃

遅攻……②と同じ

速攻……②と同じ

これによると、アメリカは、Ｂ区域での得点が最も多く、次にＣ、Ｄ区域からの得点であり、この区域から全得点の80％を占めている。しかしＥ区域

図２―１　攻撃回数に対するシュート率、技術的なミス率、シュート成功率

図２―２　ポジション別によるシュート成功率
（注：上段の％は区域、下段は全シュート率からみた％値）

特別寄稿

1990年ジャパンカップに出場した男女ナショナルチームのゲーム分析

阿部徳之助

I　はじめに

ハンドボール競技のゲーム分析に関する研究はこれまでにも、水上[2]ら、松井ら[3]、阿部ら[1]の報告がある。水上らは、1986年第11回男子世界選手権に出場したチームのビデオテープの再生から、個人やグループの技術、相手チームの攻撃や防御に対する対応について分析している。松井ら、阿部らは1988年ソウル・オリンピックに出場した男女チームの体格とシュート成功率、攻撃のミスなどとの関係の調査結果から、日本チームの競技力向上の条件としては、体格の大型化や基礎的な技術の習得と基礎体力の育成の必要性を指摘している。

本研究は、松井らのゲーム分析方法を用いて1990年ジャパンカップ出場の男女ナショナルチームの分析を行い、日本ハンドボール選手の競技力向上に役立てる資料を得ることを目的とした。

II　方法

1．期日　　1990年５月４日から６日の３日間

2．場所　　東京体育館

3．参加国

男子：日本、アメリカ、スウェーデン

女子：日本、韓国、フランス

4．試合方法　男女共リーグ戦形式

5．分析方法

全試合をビデオで撮影し、ビデオからの試合分析は以下のとおりになった。

(1)攻撃回数に対するシュート率（チームがボールを保持してから攻撃した回数と攻撃中にミスが発生せずにシュートした回数との割合である）

(2)攻撃回数に対する技術的なミス率（パス、オーバーステップ、ラインクロス、警告、退場等）

(3)シュート成功率

(4)攻撃のパターン別からみた得点

(5)ポジション別のシュート成功率などの５項目の分析をした。

III　結果

1．身長と年齢

図１は1990年ジャパンカップ出場チ

図１　1990年ジャパンカップ出場チームの身長と年齢

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三一三号
昭和四十年六月十日 平成三年九月二十六日 印刷
第三種郵便物認可 平成三年十月一日 発行

東京都渋谷区神南一―一―一
電話 代表 三四八一―二三六一
振替 東京 六―五八三四八番
編集兼発行人 安藤純光
定価三百五拾円(年間購読料三千三百円)